

## 中国語中国文学

### ◇教員◇

教授：藤井省三、大西克也、齋藤希史

専任講師：孫軍悦

助教：白井澄世

### ◇学生◇

学部：2名、修士課程：7名、博士課程：15名

### (1) 中国語中国文学専修課程の概要

亀の甲羅や牛の骨を焼いて神の意志を問いかけていた時代から 21 世紀まで、中国語ほど長い歴史を持ち、多種多様な思惟や感情を記録してきた言語は世界でも稀である。中国語中国文学専修課程が対象とするのは、この歴史の全てである。中国文明はその周辺に無数の多彩な文化を育み、日本・韓国・ヴェトナムでは漢字を学んで作られた文字がそれぞれに独自の思惟や感情を綴ってきた。また中国の西方は砂漠や大山脈によって隔てられながらも、常にインドや西アジアの大文明に向かって開かれ、多くのものを吸収した。中国語中国文学の歴史は絶えざる文化交流の歴史でもあった。

本専修課程には、この長い歴史を扱うにふさわしい多彩な教員が揃っており、中国語中国文学の幅広い領域をカバーする。

次に本専修課程の特色として挙げたいのは、学生や研究員に外国人の多いことである。特に大学院生や研究生には中国・台湾・香港などアジア諸地域からの留学生が多く、また、海外からの外国人研究員（訪問学者）も常に数名が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、授業や合宿にも外国人研究者の参加を迎えて、学生との交流が活発に行われている。

外国人留学生の数は、研究生も含めれば、2017年4月現在、中国・台湾からの留学生 15 名が在学している。留学生の参加は授業のあり方にも影響を与えており、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。日本人学生にとっては、

いながらにして中国語会話が上達し、我が国とは異なる様々な見方や研究方法が学べるという点で極めて恵まれた環境である。

## (2) 専任教員の紹介

続いて現在の教員とその研究領域について紹介しよう。

藤井教授は近現代文学を担当し、文学史の講義では、19世紀末から20世紀初にかけて「文学」という概念が誕生して以来、現代に至るまで、魯迅・胡適・巴金・張愛玲・趙樹理・鄭義・莫言、香港の也斯・李碧華、そして台湾現代文学の李昂などを取り上げて論じる。演習では安妮寶貝（アニー・ベイビー、1974-。2016年より筆名を「慶山」に改名。）など村上春樹チルドレンの作品を味読しながら、ポスト鄧小平時代(1997~)以後形成された新興市民社会の有り様を解説している。また邦訳小説や日本語字幕付きDVD映画（ジャ・ジャンクー（賈樟柯）、ウォン・カーウァイ（王家衛）、侯孝賢（ホウ・シャオシエン）、魏徳聖（ウエイ・トーション）など）を使って中国・香港・台湾の現代文化の講義も行っている。

著書はロシア盲詩人を鏡とする日中比較文学研究の『エロシエンコの都市物語—1920年代東京・上海・北京』（みすず書房、1989）、戦前の中国文学研究者と魯迅・巴金らとの交流が、日本の中国侵略により挫折していく軌跡を追った『東京外語支那語部—交流と侵略のはざままで』（朝日選書、1992）、魯迅の受容史を論じた『魯迅「故郷」の読書史—近代中国の文学空間』（創文社、1997）、台湾文学を論じた『台湾文学この百年』（東方書店、1998）、魯迅をマクロ的そしてミクロ的に読む『魯迅事典』（三省堂、2002）、現代中国映画論の『中国映画 百年を読む、百年を描く』（岩波書店、2002）、村上春樹における魯迅との影響関係および日中戦争歴史の記憶、そして中国・香港・台湾における村上受容をめぐる比較文学研究書『村上春樹のなかの中国』（朝日選書、2007）、又広く魯迅と日本作家の影響関係を論じた『魯迅と日本文学—漱石・鷗外から清張・春樹まで』（東京大学出版会、2015）などがある。

翻訳には、鄭義『中国の地の底で』（朝日新聞社、1993）、『神樹』（朝日新聞社、1999）、莫言『酒国』（岩波書店、1996）、李昂『自伝の小説』（国書刊行会、2004）、魯迅短篇集『故郷／阿Q正伝』（光文社古典新訳文庫、2009）などがある。

大西教授は「上古漢語」と呼ばれる紀元前の中国語文法を専門としてお

り、『論語』『孟子』『左伝』『史記』などの日本人にも馴染み深い古典を研究材料とし、個々の動詞や名詞の文法的特性を丹念に記述しつつ、上古の中国人が言葉によってどのように身の回りの世界を認識し、カテゴリー化していたのかという関心から、上古中国語の文法構造の解明に力を注いでいる。また、近年脚光を浴びている戦国秦漢時代の出土文字資料をいち早く文法研究に取り入れるとともに、文法、音韻などの総合的な角度から新出土の文字を解読、言語表記システムとしての漢字の歴史にも関心がある。主な著書・論文に、『アジアと漢字文化』(共著、放送大学教育振興会、2009)、「戦国時代の文字と言葉—秦・楚の違いを中心に—」(長江流域文化研究所編『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』雄山閣、2006)、「中国語における指示性範疇化の胎動」(『中国語学』261号、2014)、『戦国縦横家書/馬王堆出土文献訳注叢書』(東方書店、2015、大櫛敦弘との共著)などがある。

授業では、戦国時代の出土文字資料の解読や電子コーパスを使った演習、漢字・文法・音韻史をテーマとした講義、古代中国語文法に関する論文の講読を行っている。

齋藤教授は中国古典詩文を専門としつつ、近代に及ぶ東アジアの言語と文学にも研究領域を広げている。先秦以来の歴史をもつ伝統詩文は、それを記した漢字とともに東アジア全域に広く伝播し、多様な文字世界を形成した。齋藤教授の近年の関心はこうした世界における“読み書きする主体”のありかたに向かっており、『漢字世界の地平 私たちにとって文字とは何か』(新潮選書、2014)、『漢文脈と近代日本』(角川ソフィア文庫、2014)などでは、古典詩文研究者ならではの切り口で東アジアの文字や言説を分析する。また、『漢詩の扉』(角川選書、2013)では、唐詩の名篇を取り上げて、詩によって自らの生の輪郭をさだめた詩人たちの姿を描く。『漢文脈の近代 清末=明治の文学圏』(名古屋大学出版会、2005)でサントリー学芸賞、『漢文スタイル』(羽鳥書店、2010)でやまなし文学賞を受賞。

授業では、中国古典詩文を読む初級演習「古典詩文演習」を駒場キャンパスで開講している。さらに学部・院生共通の「漢魏六朝詩文選読」「唐宋詩文選読」で、原文を正確に読み解く読解力を養う中で、工具書やデータベースに止まらず、漢籍に直接触れることを重視している。他方、大学院向けの授業では、古典文学藝術論に重点を置いた読解や、多様な研究テーマの学生との討論を主体とした授業を行っている。

孫軍悦専任講師は、中国の近現代社会において、日本文学や文化がどの

ように受容されてきたか、主として翻訳の問題から研究を進めている。その研究領域は日中近現代文学から、村上春樹に代表される同時代日本文学、或いは映画など広い領域へと広がっている。主な論文・著作に「エロティックな通俗小説から格調の高いベストセラーへ—中国大陆における『村上春樹』というブランドの生成過程—」（『村上春樹と小説の現在』和泉書院、2011）、「世界は、あなたたちのものまたわたしたちのもの—『ノルウェイの森』から見た中国大陆の文学生産体制の転換—」（『国際日本学研究の最前線に向けて—流行・ことば・物語のカー—』（臺大出版中心、2013）などがある。授業では、学部生向けに「上級中国語精読講義」を、大学院では、中国語での学術論文執筆のための「アカデミック・ライティング」を担当している。また中国近現代の小説をテキスト分析によって読み解く「中国現代文学精読」があり、Aタームには、孫講師が現在最も深い関心を抱いているテーマを中心に、「戦後日中文藝交渉史研究」の講義を予定している。

白井助教は五四期の文学者を中心に、中国近現代文学における日本およびロシア文学の影響について研究を進めている。主要業績には、博士論文『近代中国におけるロシア文学の受容—李大釗・魯迅・瞿秋白ら五四期知識人を中心に—』のほか、「五四期におけるドストエフスキー像について」（『東方学』119 輯、2010）、「魯迅与 1920—30 年代中国陀思妥耶夫斯基的接受—在与同時代日本・西歐的關係之背景下」（『韓中言語文化研究』18 輯、2008）等がある。

### （3）学内外講師など

本専修課程では、学内や学外からも講師を招請し、授業科目の一層の充実を図っている。

2017 年度は、本学東洋文化研究所の大木康教授による「『四庫全書総目提要』講読」、「『聊齋志異』講読」、総合文化学科の谷口洋教授による「楚辞『天問』講読」、垂水千恵・横浜国立大学教授の「台湾の文化と社会」を開講している。Aタームには、映画論について三澤真美恵・日本大学教授の「中国語圏映画研究」があり、現代中国語についての概要と文法については佐々木勲人・筑波大学准教授の「中国文法研究入門」がある。さらに横田恭三・跡見学園女子大学教授による「字体の変遷（篆書・隸書・草書）」、千葉謙悟・中央大学准教授による「欧文資料による中国語研究」が開講される予定である。このほか、小松謙・京都府立大学教授による集中講義「白

話文学の成立と展開」を予定している。

#### (4) 中国留学制度と就職状況

本専修課程からは毎年、日中両国政府交換による政府奨学金留学生として、学部生や大学院生が若干名、北京大学、復旦大学、南京大学、台湾大学などに留学している。また、十数年来、毎年3月に学部生1名が日本航空主催の学生台湾訪問団に参加している。また私費で夏休みなどを利用して短期研修に出かける学部学生も少なくない。学部在学中に1年間留学する者もいる。

学部卒業後は大学院に進学し、研究者への道を歩む者が多いが、中国に対する社会的関心の高まりから、日本経済新聞社・NHK・東方書店・光通信・野村證券・JCB・コニカ・ミノルタ、アフラック、NTT東日本など、新聞・テレビ・出版のほかメーカー・商社・金融・通信など各種企業に就職して活躍する者も多い。

私たちはみなさんがともに中国研究の大海に乗り出してくださることを心待ちにしている。授業風景や留学・就職状況などについては、中文のホームページ委員会が編集している中国語中国文学研究室ホームページ(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/chubun/>)も参照していただきたい。